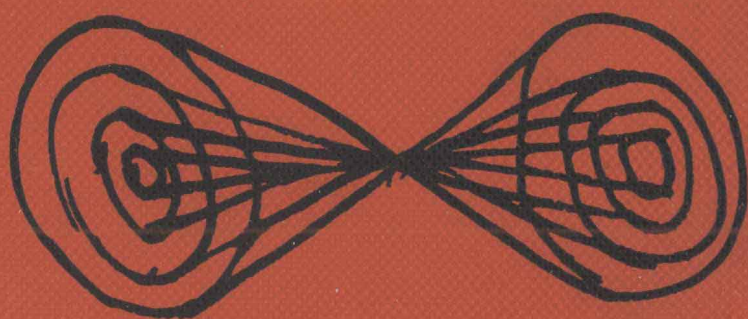




中世文学集★

ローランの歌 狐物語 ビエール・
バトラン先生 結婚十五の歓び ヴ
ィヨン詩集 サン・ヌーヴェル・ヌ
ーヴェル

佐藤輝夫・山田壽・新倉俊一・渡辺
一夫・鈴木信太郎・神沢栄三訳

世界文学大系

65

筑摩書房版

世界文学大系 65

中世文学集 ★

昭和 37 年 9 月 30 日発行

定価 550 円

訳者代表 鈴木 信 太 郎

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165763 電話 (291)局 7651

目次

ローランの歌

狐物語

ルナールの冒険

ルナールの裁判

ピエール・パトラン先生

結婚十五の飲び

ヴィヨン

フランソア・ヴィヨン形見の歌

ヴィヨン遺言詩集

雑詩篇

サン・ヌーヴェル・ヌーヴェル

中世文学にあらわれた人間

解説

解題

佐藤輝夫 訳 5

山田 齋 訳 97

新倉 俊一 訳 126

渡辺 一夫 訳 149

新倉 俊一 訳 183

鈴木信太郎 訳

247

255

308

鈴木信太郎 訳 313

神沢栄三 訳

J・ノードストレーム

新倉俊一 訳

渡辺 一夫 訳

471

465

453

裝
幀
庫
田
發

ローランの歌

テキスト解題

一 『ローランの歌』は次の諸写本と、外国訳もしくは翻案とによって伝えられている。

(一) オックスフォード・ボードレイアン・ライブラリー所蔵写本 (No 23 du fonds Digby) 略号〔O〕

(二) ヴェネチア・サン・マルコ図書館所蔵写本 (la cote IV du fonds français) 略号〔V〕

(三) シャトールー市立図書館所蔵写本。略号

〔C〕

(四) ヴェネチア・サン・マルコ図書館所蔵写本 (la cote VII du fonds français) 略号〔A〕

(五) パリ国立図書館所蔵写本 (860 du fonds français) 略号〔P〕

(六) リヨン市立図書館写本 (984 du fonds français) 略号〔L〕

(七) ケムブリッジ・トリニティー・カレッジ所蔵写本 (R. 3. 32) 略号〔L〕

(八) コンラッド・ルオランデス・リート『(Ruorlandus Lief) 略号〔K〕

(九) ノルウェー『カルロマンナスの歌』(Karlamagnusaga) 略号〔Z〕

二 『ローランの歌』の刊本。以上のうち最も古くかつ終始ほぼ完全な写本は〔O〕で、一八三六年フランシスク・ミシェルによって初めて刊行されてこのかた今日まで約百三十年のあいだに、二十余人の刊行者が、それぞれ独自の

の方法をもつて、あるいは他に追従して、これを刊行しているが、いさ筆者が参照したものの掲げると次のようにあらわである。

1) *La Chanson de Roland et le Roman de Ronevieux des XII^e et XIII^e siècles, publiés d'après les manuscrits de la Bibliothèque Bodléienne à Oxford et de la Bibliothèque impériale*, par Francisque-Michel Paris, 1869.

2) *La Chanson de Roland, Poème de Thuroville, texte critique accompagné d'une traduction, d'une introduction et de notes*, par F. Génin, Paris, 1850.

3) *La Chanson de Roland, nouvelle édition classique, précédé d'une introduction et suivie d'une glossaire*, par L. Clédat, Paris, 1886.

4) *La Chanson de Roland, texte critique et commentaire, grammaire et glossaire*, par Léon Gautier, édition classique. Tours, 1920.

5) *Extraits de la Chanson de Roland, publiés avec une introduction littéraire, des observations grammaticales, des notes et un glossaire complet*, par Gaston Paris, Paris, 1904.

6) *La Chanson de Roland, publiée d'après le manuscrit d'Oxford et traduit par Joseph Bédier*, Paris, 1931.

7) *La Chanson de Roland, Oxford Version. Edition, notes and Glossary*, by T. Atkinson Jenkins, revised edition, 1924, Boston.....

8) *Les Textes de la Chanson de Roland, édition de la geste francor éitées par Raoul Marier*, 10 vols. Paris, 1940.

9) *La Chanson de Roland, a cura di Aurelio Roncaglia, Società Tipografica Modense Editrice in Modena*, 1947.

三 本訳稿はモナチエ刊行の第一巻 *La Version d'Oxford* と「ジョゼフ・イディエ」のモナチエを底本として併用した。モナチエ版はその名の示す通り、イディエの誤記脱字を訂正しただけで、「〔O〕」のテキストをそのまま刊行したものであり、「イディエ」の版も、長年の彼の主張どおり、「〔O〕」の読みをひたすら尊重したものであるから、本訳稿は「〔O〕」のテキストをそのまま訳出したことになる。ただ「〔O〕」には若干の脱行があり、また解説不明のところもままあるので、それらの場合は異本の読みを脚注の部分に挙げて参考にしておいた。

一

われらが大帝シャルルの王は、
 まる七年をイスパニヤに在しまして
 海の辺にいたるまでこの高地を統べ給えり。
 御稜威の前には城ごとく攻め落され、
 皆も都市も撃ち毀たれて
 残るはただ山間なるサラゴッスのみ。
 此所を領じるは王マルシルとて、神を崇めず
 マホメットを拜み、アポリンに祈るやからなれば、
 所詮滅亡は免れがたし！アオイ

二

この時、王マルシルはサラゴッスに在せり。
 いまし園生に降り立ちて、木の下蔭につと寄りて、
 青大理石の台の上に横臥る。
 その周辺には二万にあまる軍兵屯す。
 王は公伯の諸將を招致して申すには、
 「やよ、皆の者よ、何たる禍の降って沸いたることよ！
 警しにこの国フランスが帝王シャルルは
 この国に來たり寇してわれらを攻め滅ぼさんとす。
 迎え討たんとは思えど、われらに軍兵なく、
 フランス方を破らんとはすれど、味方は手薄し。
 如何せばや、思案のほどあらんものは申して、
 われを死と辱しめより救いくれよ！」と。
 異教のともがら、一言だになく、答えるは
 ただ深谷の城主ブランカンドランのみ。

三

このブランカンドランと申すは、異教徒のうち
 智略衆にすぐれ、且うは豪胆の誉れ高き騎士にて、
 帷幄に策を献じて仕える忠臣なり。
 王に向かつて申すには、「など御心配に及びましようや！
 あの不遜傲岸なるシャルルのもとに使臣を遣わし、
 御帰順を申し入れ、大いなる忠誠のまことをお見せなされま
 せ。

さよう、熊と、獅子と、獾犬と、
 七百頭の駱駝と、羽替えしたる千羽の蒼鷹と、
 金銀載せた四百頭の牝驪馬と、
 それを運ばす五十台の大車を贈りましよう。シャルルは
 これをもつて備兵にたんまり給金を取らせましよう。
 して、シャルル王には、この国でずいぶん攻略をなされたの
 で、

フランスはエックスにお引取りを願いましよう。
 その時、陛下にはシャルルに蹤いて、サンリミシエルさまの
 お祭に御列席なされ、
 キリストの教に帰依あそばされ、
 名実ともに、シャルルの御家來におなりになされますよう
 してまた、もし人質が要ると申せば、その場でお送りなされ
 ませ、

(四)

十人でも、二十人でも、王が納得なさるまで。
 われらの妻が生んだ子たりとも、送りましようわい。
 殺されるのは必定なれど、みどももわが子を送りましようわ
 い！
 たとい首を刎ねられましようとも、

一

(1) シャール マーニエ
 (七四一—八一四) フランク
 王にして西ローマ帝国皇帝。

「歌」の主題となつてゐる
 七八年の戦いのおりには、
 まだ皇帝にはなつていない。
 教王レオ三世から戴冠され
 Karolus magnus と称
 ばれるにいたるのは八〇一
 年からである。

(2) 七年という数字は叙
 事詩的表現。シャルルのイ
 スパニア進攻は約二十年の
 間続くが、七八年はその
 最初。最初のこの進攻は、
 四月十九日から約四月に
 わたるに過ぎない。僅かに
 ビレネー山麓のパンペロナ、
 ジェローナ及びその周辺を攻
 略したのみ。

(3) イスパニア北・西南
 部にある都市、かつてのア
 ラゴン王国の首都、エーブル
 河沿いにある。

(4) 詩人の創造になる架
 空の人物であるが、多くの
 シャンソン・ド・ジェスト
 の中に現われている。

(5) イスラム教はキリス
 ト教と同じく一神教で偶像
 を崇拝しない。多神教であ
 るように書かれているのは、
 「歌」の詩人の誤解。この
 誤解はただにこの詩人だけ
 のものではなく、第一回十
 字軍の前後にあつて一般化
 されている。

アポリンはギリシア神話
 のアポロの対格から來たも

われらが所領と封土を失いて、乞食になり下がるよりは、はるかにまさるではござりませぬか。」アオイ

四

ブランカンドランの申すには、

「わたくしめの、この右手にかけて、

胸の上にひらひらと靡くこの鬚にかけて、申し上げます。

フランス方の軍勢は立ちどころに干を取め

故国なるフランスに引きあげましょう。

一人一人がそれぞれの妻のところに戻り、

シャルルにはエックスの御堂に御帰還、

サン・ミシエルさまの大御祭を営みまする。

その日になつても、約定の日限が過ぎて、

何がさて、われらのことにつきましては音沙汰なし。

シャルル王はその性無情にして残忍にござりますれば、

人質が首をちょん斬りましょう。でもたとい

首を斬られましようとも、麗しの国、この明らけきイスパン

ヤを失つて、

われらが不幸な目にあい、不自由を忍びまするよりは、はる

かにまさるではござりませんか。」

異教の徒の申すには、「さ、在んことを！」と。

五

評定すでに定まりたれば、王マルシルは

おのが心底を明かさんがためにパラグエのクララン、

エスタマリンと、その戦友ユードロパン、

ブリアモンと、鬚武者のガルラン、

マシネルと、その伯父マヌー、

ジョユネルと、外国人のマルビアン、

それに、ブランカンドランを加えて、さしまねきたり。

その性まこと邪なる臣下十人を選びて、さて申すには、

「いかに皆の者よ、シャルルマーニュのもとにゆかれい！

あれはいま、コルドルの市を包囲中なるぞ。

手に手に、橄欖の小枝を携えてゆかれい、

そは和平と降服のしなり。

卿らの智謀により、和議を整えて帰る暁には、

金銀はもとよりのこと、

土地も所領も、思いのままに遣わすぞ。」

異教のともがらの申すには、「ありがたき仕合せにござりまする」と。アオイ

六

評定すでに定まりたれば、王マルシルは

臣下に向かい、「皆の者、いさ、行かれい。

手に手に、橄欖の小枝を携えてゆかれよ、

して、われに替つて、シャルルマーニュに申すには、

『大王の拝みまつる神に免じて、わたくしを、お許しください。』

れ。

ここ一月と経たぬあいだに、千人の臣下を引き具し、

陛下の後跡をしたいゆき、

キリストの教えに服し、

愛と信義の誓を立てて、陛下の臣下になりまする。

またもし、人質が要るとならば、神もって差し出しまする』

とな。」

ブランカンドランの申すには、「御説かならず相果たしますす

の。なお予言者マホメットが礼拝の対象となつてゐることも誤つて事実と反する。

(9) Aoi または Aoi 全二九一節中一七二節にこの記号が付されてゐる。うち

一五八回は節の最後の行末に、六回は節の中間の行末に、他の八回は節の最初の行末に置かれてゐる。これ

が何を示すかの解釈は古来異説紛々。(1)一種の繰返しまたは感動を現わす語。(2)

字本(O)の所有者であつたジョン・グーレルの、彈唱に際しての何かメロ的な符號。

(3)感情の高まりを示す。たとえば葉符のクレセンド的な指摘。これらが推定されてゐるが、今日まだその意味は明瞭にされてはいない。

二

(1) 原語の²²は黄金色、黄色、青色と、その色彩を限定せず用いられてゐる。訳者ここではかりに「青」と訳してゐる。

(2) 詩人はイスラムの制度については何らの知識を持たない。西欧の封建制度の称呼を、そのまま当てて用いたのである。

(3) フランスの側からする美称を、敵王はそのまま用いてゐる。(4) の場合の逆である。

(4) マルシルの場合と同様詩人の創造せる架空の人物。ヴァル・フォンド(深谷)を、北イスパニアのタ

る」と。アオイ

七

マルシルは白毛の驃馬十頭を引き出さしむ、
これなん、シュアチーリの国の王、マルシルに献したるもの。
轡は黄金づくりにして、銀覆輪の鞍敷かせたり。
主命を奉ずる面々は、これなる驃馬にうち跨がり、
手にはと見れば、橄欖の小枝携えたり。
かくて、これなる一行、フランスを統治めすシャルルのもと
にたどりつく。
あな、あわれ！ シャルルの王は、騙されるとは知らざりけ
り。アオイ

八

皇帝の尊顔はことのほか麗し。
コルドルを攻略せさせ給いて、城壁を打ち崩し、
大石弩をもて、その橋を打ち倒し給えり。
部下の騎士たちの獲たる分捕り品はおびただしく、
金、銀、高価なる甲冑は、山のごとし。
巷には、異教のともがら、あるいは殺され、
あるいはキリストの教に帰依して、その影になし。
皇帝は広き園生の中に在します。
付き添うものは、ローランに、オリヴィエ、
サムソン公に、豪勇のアンセイス、
王の旗頭アンジュ公のジョフロア、
これに加えて、ジュランとジュリエ
これらの面々の在すほか、その他大勢、

(110)

馨しの国フランスが軍勢一万五千が控えたり。

かかる騎士の面々は、白絹の上に座を構え、

思慮深きもの、老いたるものは

双六遊びに打ち興じ、将棋をさして余念なく、

血の沸きたぎる若武者は、劍撃にうち興ず。

松の木の下、山楂子の花の咲くところに

純金づくりの曲衆が置かれ、

馨しの国フランスを統べさせ給う王在します。

御鬚は白く、御髪も咲く花のよう白く垂れ

御身つきは気立く、御顔容はいと厳かなれば、

王はいずくと尋ねるものにも、一目でわかる。

さて使者の面々は地上に下り立ち、
愛敬をこめて会釈す。

九

(111)

ブランカンドラン、まず口を開いて王に言うには、
「われら崇めまつるべき、栄光に輝き給う神の
御加護を受けさせられますよう！
して、茲にわたくしは、勇士マルシル王のお言葉を言上仕り
まする。」

王には、心より救済の御教えを求められます。

してまた、陛下には莫大なる品々を、宝庫のうちより差し
上げた。

すなわち、熊、獅子、鎖にとめたる猊犬

七百頭の駱駝、千羽の羽替わりしたる蒼鷹、

金銀を積みたる四百頭の牝驃馬、

貢ぎを運ばす五十台の大車、

それに、東国の良質の金貨も沢にござりますれば、

ラゾナ・テュデラ司教区に
属するマルエンダと見る向
きもあるが、当を得ている
か否か明瞭ではない。二四
六一行のヴァルテネブルス
(無明が各の場合と同じく、
ロンスヴォーからサラゴッ
スに至る街道のいずれかの
地点にあるものと仮定する、
詩人の想像の所産であろう。

三

(1) 二頭の牡牛のひく約
半トン積載可能な輻重車。

ここで積載するのは、前行
の「四百頭此驃馬」の場
合同じ「金、銀」である。

(2) 十一、十二世紀封建
時代において行われた臨時
の傭兵。シャルルマーニュ
の時代には王の布令に応じ、
それぞれの名主が「家人」
(familiares) をひっさげて戦
に参加したので、傭兵とい
うものはない。これは一種の時代錯誤である。

(3) 今日のベルギーにある
アーヘンのこと。シャペ
ル(御堂)を中心として七つ
の壮麗な宮殿が建ち並んで
いたと言われる。シャルマ
ーニュの時代にあつては、
フランスという称呼はシャ
ールの全領域を指していた
ので、エックス・ラ・シャ
ペルは、この広義の「フラ
ンス」内にあった。

(4) 詩人はこのほかに、
五三行と一五二行と一四二
八行においてこの聖者の名
を挙げている。ただし三七

備兵士には十分お給金をとらせることができましよう。陛下には、この国に久しいあいだ御滞在、なにとぞフランス国はエックスに御帰還くださりますよう、わたくしの主君も、御供を仕りたいと、かように申しておられます」と。

皇帝は両の御手を高々と神の御方へ差し延ばし給い、頭を垂れて、御思案に入らせ給う。アオイ

10

皇帝は頭をうつぶせさせ給う。

にわかに御答えなし。

熟慮して仰せらる、これ皇帝の御性なり。

さて、竜顔をきつと挙げさせ給いて

使者に仰せあるには、「よくぞ申された。

なれど、マルシル王はまさに予の大敵なり、

いまでもこの言われたることを、

何をもつて信じてよいのじや。保証があるか」と。

「人質をもちまして」とサラセン人は、

「十人でも、十五人でも、二十人でも差し上げます。

生命にかかわることは存じながら、わが小伴も、その数に入れます。

いやなに、もつと身分高きものも、差し出します。

して、陛下が御領の宮廷に御帰還あつて、

危難の聖ミシエルさまの大御祭をおこなわせられる時、

われらの主君も御供をいたして

神さまが陛下のために造らせ給える御池殿にて、

キリストの教に帰依したいと、かように申されておりま

る。」

シャルル、御答えあつて、「まだ救われる望みはある」と、アオイ

二

黄昏は美しく、陽はなお明るし。

シャルルは命じて、十頭の驃馬を厩に引かせ給う。

大広庭には天幕を張らせ

十人の使者を宿らせ

十二人の使丁をして、鄭重に款待せしめ給えり。

夜は闇けて、やがて暁とはなりぬ。

皇帝は朝まだきに起き出で給い

朝の勤行と弥撒を聞こし召したるのち、

松の木の下に出でまして

諸將を召し、評定を開かせ給う。

何事にまれ、フランス人に処置を委ね給う御意と覚えし。ア

オイ

三

皇帝は松の木の下におり立たせ、

諸將を召して評定を開かせ給う。

オージェ公には、チュルパン大僧正、

老武者のリシャルには、その甥のアンリ、

してまた、ガスコーニュが健気なる伯アスラン、

ランスのチボーには、その従弟のミロン、

してまた、そこにはジュリエとジュランあり、

これなる人々とともに、伯ローラン馳せ参じ、

豪胆にして高貴のオリヴィエ、またこれに加わりたり。

行と五三行ではただ単に

「サン・ミシエルさま」と

あるだけで、後二者のよう

に「危難の」という修飾詞

はつけていない。後の場合

では明らかにノルマンジ

の海浜にあるMont Saint-

Michel du peril de la

merを指す。モン・サン-

ミシエルは、八世紀の初頭

(七〇三年)アグラランシの

司教聖オベールにより開基

されたもので、その祭日は

十月十六日である。ここ以

外のこの聖者の祭日は九月

二十九日と定められている。

(5) [V4] 以下[C] [V7]、

[N]、[K]では、いずれも

多少の相異はあるが、この

節の最後に、次の行を持つ

ている。

異教のやから叫んで言う

には「でかしたな! うべ

ない申す」と。

四

(1) 九月二十九日か、然

らずんば十月十六日である。

三の注(4)参照。

(2) 「驚しの国フランス」

と好対照の美称である。

五

(1) 以下に挙げられる十名の異教徒は、いずれもブランカンドン同様詩人の創造せる人物。パラダエはカタロニアアゼルグ河沿いにあり、レリダから三里ばかりの地点。二〇〇行に現われた記述で見ると、

フランス国がうちなるフランス人、その数は一千余。味方を裏切るガヌロン^①また馳せ参じて、評定ここに開かれたれど、これは禍いの因となるこそ由々しけれ。アオイ

三

皇帝シャルルの仰せには、「いかに諸將よ、王マルシルは、予がもとに使者を送つて参つた。おのが宝庫の中より、巨額の貢ぎを贈りたい、熊と、獅子と、鎖にとめたる狼犬と、

(10)

七百頭の駱駝と、羽替わりしたる千羽の蒼鷹と、アラビアの黄金載せたる四百頭の牝驪馬、それに、五十余台の大車を添えて、とか申す。

だが、予に、フランスへ引き上げてくれいと申すのじや。マルシルは、予に蹶いてエックスの宮殿に來たり、

ありがたきわれらの御教えに服して、

キリスト教徒となり、改めてこの国に封じてもらいたいとな。だが、予には、どうもその本心がよくわからぬ」と。

フランス人は口々に、「御油断はなりませぬ！」アオイ

四

皇帝かく仰せありたり。この時、伯ローラン、こは面妖^②と思ひけん、すつくと立つて、異議唱えたり。

言うには、「陛下、マルシルを信じ給うはもつてのほか！

われら、ここ、イスパニヤに参つてまる七年、

陛下の御為にわたくしは、ノーブルとコンミューブルを征服し、

ヴァルテルヌ^③とピース^④の土地を切り取り、バラスグエ^⑤、テュエール^⑥、セジール^⑦を占領いたしました。然るにマルシルめには、ただだ不信の振舞いあるのみ。かつて十五人の異教徒をすぐりて、陛下の御前に送りました。彼らは手に手に橄欖の小枝を携えて参り、

只今のと同じ口上を述べました。

その時にも陛下は、フランス人に諮られましたるが、軍議はいささか重きを欠き、

陛下には、二人の將軍を召してあの異教徒めのもとに遣わされました。

一人はバザン、一人はバジール^⑧。ところが、やつは、二人の首をアルチュエリのあたりの山の中に、ちよん切つたではございませんか。

御計画どおり、御戦さをお続けなされませ、

御布令を聞いて集まつた強者を、サラゴッスに指し向け、全軍をあげてこれを包囲し、

悪人めに殺されたる者の、復讐をなさりませ。」アオイ

五

皇帝しずかに御頭を垂れ給ひ

御鬚をしごき、御口髭をひねらせて、

甥御の言葉に、可しとも不可とも仰せあらず。

フランス人またおしなべて黙せるのみ。

この時ガヌロンすつくと立つて、御前に進み、

一同を尻目にかけて口を切り、王に向かって申すには

「誰彼の区別なく、君の御為にならぬことを申す

やつぱらの言は、夢にもお取り上げこれなきよう！

王マルシルが陛下の臣下となり、その上で、

(110)

ローランがシャルルのために攻めしたのもっとも遠い地点である。

(2) たぶん南イスパニアのエーブル河沿いのコルドバであろう。史実的には、シャルルの軍隊はそこまで達していないが、『歌』の初めにある通りシャルルは全イスパニアを平定しており、また事実そうした伝説は古くからある。

七

(1) シュエアチリは確認未詳の地名。

八

(1) エッジナルは『カロ大帝伝』の中で、七七八年大帝の殿軍がバスク族の襲撃に遭い全滅したことの記述をなした後で三人の大将の名を挙げている。その一人がローラン(Hrno-laudus)で、身分は「辺疆フリタニアの總督」とある。史的ローランの記述はこれが唯一である。叙事詩のローランはシャルルマーニウの甥で、常にその片腕として活躍する強剛の士として描かれているが、その父母の名前について異説多く、父は宮宰ミロン、母はシャルルマーニウの妹ベルト、あるいはジラン、あるいはブックエルトの名が

御手によりイスバンヤ全土に封ぜられ、
且うは、われらの信仰する御教えに服したいと、
両手を合わせて懇願いたす。その申入れを、
無下に退け給うよう進言いたすやからは
われらが生死に、いささかも思いを致さぬ呆けもの。
思いあがった進言は、危うし、危うし！
痴けの言葉はお退けあって、思慮あるものに躓きたいものに
ござります。」アオイ

二六

この時、ネーム大前に進む。

この人、宮廷随一の忠臣なりき。

王に向かって申すには、「只今御聞き及びの

伯ガヌロンのお言葉は、もつとも至極、

従うほかはござりませぬ。

マルシル王は戦いに敗れ申した。

陛下には、その城をことごとく撃ち破り給い、

大石弩をもって、その城壁を打ち毀ち、

都市は焼かれて、兵は敗亡。

いま、降服を申し入れて参りましたるを、

これ以上さらに攻めますることは、ちと罪かと心得まする。

人質を入れ、その帰順の誠を示そうとする上からは、

此度の大戦も、これをもってお停めあるべきかと心得まする。」

フランス人は一斉に「公の言やまことに善し！」と。アオイ

二七

「皆の者よ、かのサラゴッスなる王マルシルのもとに、
誰をか使者に遣わすべき？」
ネーム太公答えて言うには、「翼わくばわたくしが！
さ、さ、御手袋と御杖を賜わりますよう」と申せば、
王は答えて、「そちは予のよき相談相手じや、
この、わしの煩悩と口髭にかけて、
そう遠いところまで、離れて行つては相成らぬ。
さ、退つて坐るがよい！ 誰もそちを名指してはいぬ。」

二八

「皆の者よ、サラゴッスを領じめるかのサラセン人のもとに、
誰をか使者に遣わすべき？」

この時ローラン答えて言うには、「某こそ！」と

伯オリヴィエは、「とんでもないこと！
おんみは豪毅で気が荒いゆえ、
かえつて事を面倒にするおそれがある。
陛下の御許しさえあれば、某こそ！」と。

王は答えて、「二人とも、まずは控えい！
そちも、あれも、かの地に足を運ぶことは相成らぬ。
見ぬか、このひらひらと風に靡く鬚に誓つて、
皆の者よ、十二人衆の面々を名指すことは、まかりならぬ
ぞ！」

口ふさがれてフランス人は、黙然として控えたり。

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

フランスのチュルバン席を立て、王に言うには、
「フランスの強者どもは棄ておかれませい！」

挙げられている。またその
生涯の機微について、シャル
ル自身の子であるという
説もある。「ローランの歌」
では、すでに実父はなく、
母はガヌロンの妻となり、
その間に義弟のボードワン
が生まれている。
(2) 史的オリヴィエの人
物考証は皆無。たぶん詩人
の創造せる人物であろう。
『歌』の中では「二〇八
―九行で、詩人はローラン
の口を通して、ローネル
の漢谷を領するレニエ侯の
一子」と言っている。妹に
オード姫があり、ローラン
の許嫁になっている。
(3) とくに詩人の創造せ
る人物か、人物考証はま
ったく未詳。
(4) グリーズゴネル(灰
色長衣伯)とよばれたアン
ジュ・伯ジョフロア一世の
こと。九五四―八六年の間
活躍せる人物。ソアツンの
戦いにおいて、この人は
事実上フランス国王の旗頭
を勤めていた。
(5) 人物考証なし。詩人
の創造せる人物であろう。
(6) 十二人衆が宮廷の大
身の臣下を指して言われる
のに対して、並みの騎士は
事実「その他のものども」
とよばれていた。
(7) シャルルマーニユは
イスパニア戦争の時その齡
三十六歳であった。シャル
ルの風貌の描写には叙事詩
的誇張がある。

陛下には、七年このかたこの国に御滞在、

この人たちの心労は、並大抵ではござりませぬ。

されば、陛下、わたくしに御手袋と御杖を。

あの、イスパニヤはサラセン人の所に参つて、

その面つきを、ちよつくら見て参りとう存じまする。」

皇帝御不興氣に仰せあるには、

「退つて、あの白絹の上に坐られよ、
命令のないうちには、二度とは申されな。」アオイ

二〇

皇帝シャルルの仰せには、「いかに、フランスの騎士たちよ、
いざ、夙く選ばれい！ わが領土のうちより、
マルシルがもとにわが使命をもたらす者を」と。

このときローランの声あつて、「義父ガヌロンこそ！」と答
えたれば、

フランス人は一斉に、「いかにもこれは適任なれ、
ガヌロン殿をさしおいては、大いなる知恵者はほかにござら
ぬ」と同じたり。

ガヌロンありありと苦悶を面輪に現わして、
紹の大いなる皮衣、肩よりさつとひっぱずし

練絹の着長一つとなる。

碧き眼は鋭く光り、傲然たるの面構え、

胴体すんなりとして、胸張り上げたその姿は

並みいる諸将も、しばし見とれるばかりなり。

ガヌロン、ローランに声かけて、「痴けめが！ こは何たる
氣遣い沙汰ぞ！

予が汝の義父たることは、いずれもの知るところ。

さるを、汝が、マルシルのもとに、われをば行けと指名する

とは！

幸いにして、生きて彼処より戻る曉には、

きつと手痛い目にあわせ、

汝の生きとし生ける限り、思い知らせてくれようぞ」と罵れ
ば、

ローラン答えて、「烏滸の言葉聞くものかな！

ひとの脅迫にひるむ男でないことは、いずれもが御承知
使者たるものは、賢者ならではと思へばこそ、名指せしもの
を。

王様の御意とあらば、いつにても替つて進ぜる。」アオイ

二一

ガヌロン答えて、「なんの、なんの、汝に行かれてなるもの
か！

汝はわが家人にあらず、われた汝の主にあらず。

使いをせよとはシャルル王の御仰せなれば、

サラゴッスは、マルシルのもとに行かいでか！

だが、この心のむしゃくしゃを晴らさんがためには、
少し、何事かしでかそうやもはかり知れぬぞ！」

これを聞くなりローランは、大声あげて笑いたり。

(二〇)

二二

ガヌロン、ローランの高笑いを耳にするや、

無念やるかたなく、その憤ろしさに

胸は裂け、氣も失せなんばかりなり。

されば、伯ローランに向かって言うには、「憎しや憎し！
不当にも、よつくそ某を指名いたされたな。

九

(1) ジェンキンス、第四
行の次に(V7)と(N)になら
つて次の一行を挿入してい
る。「キリスト教徒の列に
並びたき」所存。但しこ
の行は(V4)にもない。

一〇

(1) 十一世紀中葉におけ
るこの修道院の名は San-
ctus Michael in pericu-
lo とうのちあつた。離れ
島に造られたその御堂に詣
でる巡礼は、いつ海水にそ
の身をさらわれるかわから
なかつたので、「海の危難
の聖ミシェルさま」という
称名ができたものと思われ
る。三の注(5)参照。
(2) エックス・ラ・シャ
ペルの宮殿には温泉があつ
て、そこが洗礼池として用
いられていた。

一一

(1) 黄昏を日没後と解す
れば、この行矛盾を含む。
古来多くの刊行者は種々修
補に苦心しているが、この
訳稿では(O)の写本通り訳
出した。

(2) 諸将を評定衆として
フランスの王は常に衆議を
徴していた、けれど衆議の
採択権は王が持つていて、
評定衆はただ意見を述べる
だけである。

一二

正統の皇帝陛下、さ、この通り、御前にまかり出でました、御意まさに果たす覚悟にござりまする。」

三

「所詮、サラゴッスには参らなければなりません。アオイ彼の地に参りますものは、とうてい帰っては参れませぬ。ことに氣にかかりますことは、陛下の御妹御を妻にいたして、

一子をもうけております。この世にたぐいのない伴、ボードワンにござりまする」とこう言つて、「末は頼もしき若者にござりまする。

すべての所領知行地をこれに譲りたき覚悟にござりますれば、なにとぞしかと、御後見願わしゅう。あれには、もう二度とは会えぬと存じます。」

シャルル答えて、「そう気が弱うてはのう。が、命令とあれば、行ってもらわねばならぬ。」

四

王宣く、「ガヌロン、さ、さ、近う寄れい、アオイして、この杖と手袋を受けられい。

その方も耳にせるごとく、フランス人の名指しじや。」ガヌロン、「いえ、ことごとく、ローランめの仕業！

わたしは生ある限り、ローランを憎みまする、

いやなに、オリヴィエも、あれの戦友でござれば、

陛下の大前にて、これなる皆の者に挑戦いたしまする。」

王は答えて、「その憎しみはちと度が過ぎるわ。

いずれにもせよ、行かねばならぬ、予の命令じや。」「参りますとも。しかし生命は保証できませぬ、アオイバジールとその弟のバザンの例に見ましても。」

五

皇帝右手の御手袋を差し出し給う。

伯ガヌロン、氣のすすまぬ使命なれば

受け取る利那、御手袋はたと地に落つ。

フランス人はこれを見て「はて合点のゆかぬ振舞いかな！今度の御使い因をなして、禍いのなければよいが」と申せば、ガヌロン言うには「いずれ御報告はいたす所存」と。

六

「陛下、お暇をいただきとう」と、ガヌロンは、「一刻の猶余もござりませねば、これよりまかり出でまする。」

王は、「キリストとわが名にかけて、さらばじゃ！」と、仰せあり、

右手にて、ガヌロンを免罪し、十字を切り給い、御杖と親書を授け給えり。

七

伯ガヌロンは、おのが陣屋に立ち帰り、

ありおうあまたの具足のうちより、

いとみんごとなる者を選びて着す。足には黄金造りの拍車を嵌めこみ、

(1) シャルルの弟カルロマンの臣下として、七七一四年にロランバルシア王ディディエを援けてシャルルに刃向かつた Auncelin がこの人物の原型となる。フランス各地にその伝説が拡まり、それが叙事詩に取り入れられたものと思われる。『歌』ではローラン亡きのち、これにかわつて先陣の指揮者となる。

(2) 最初サン・ドニ修道士、後フランスの司教座につき、七五三—九四年の間在職した。『歌』では僧官戦士の典型として描かれている。

(3) ノルマンジ公リシヤール一世のこと。九四三—九六年の間統治。その甥アンリは人物考証未詳。

(4) 『勇』を「後裔」の意に取り、征服王ギヨーム一世の子アンリ一世と見る向きもいる。いづれにしても、この両者ともロンスヴオーの戦いより二百年ないしは三百年も後代の人物である。

(5) ガスコニュ伯として挙げられているが、この名前はむしろ北フランスにおいて多い、けだし詩人の想像上の人物か。

(6) 史上に該当者なし。この人物は従弟のロンととも、二四三三行において、敵軍の全滅せる戦場の警護を仰せつかる。また「バリガン・エピソード」

の中では、ネヴロン伯、オットー侯とともに、第六軍

ミユルグ^レなる太刀を腰に帯し、
軍馬ターシユブロン^の背にうち跨がるに、
鎧^をを抑えしは、叔父のギヌメル^{なりき}。
多くの騎士どものうち沈みたる有様は、はたの見る目も憐れ
にて、

「おん痛わしゅうござりまする、殿」と、みな口々に、
「長の年月を王宮にてお過ごしなされ、
高貴の方よ、と称ばれたおん身でござりましたるに。
それを、どなたが使者にお名指しでござりまするか、
そのような不屈き者は、シャルルさまからは見放され、ろく
なことはございますまい。」

伯ローランさまとはお近しい親子の御間柄なれば、
そのようなお名指しなど、できぬはずではございませんか」
と。

してまた重ねて、「殿、わたくしどもを御供にお連れくださ
りませ」と言えは

ガヌロン答えて、「ならぬ、神様も御反対じや！

わし一人が死ねばよい、おみたちは生きるのじや、
よいから、誓しの国フランスに帰って、

わしからと申し、奥によしなに伝えてはくれ、

あ、わが友で仲間のピナーベル^{にも}、同様に。

あのボードワン、そちたちも承知の通り、わしの件じや、

あれを援けて、主に盛り立ててもらいたいと。」

言いしも果てず、陣屋を立ち出で、かなたを指して駆けりゆ
く。アオイ

三

ガヌロン、高き橄欖の木立が下蔭を駆け貫き、

サラセンの使者に追いつけば、
ブランカンドラン、駒の歩みを緩めつつその傍に寄り添って、
胸に一物秘めながら、かたみに言葉をまじえあう。
ブランカンドラン、まず口を切り、「シャルルの王はいみじ
くも威き御方かな！

アップリアとカラブリア全土を攻略し、
海を渡ってイギリスを攻め、
サン・ヒエールさまの御為、お賽銭を得させ給いしとは。
して、わが国に、何をお望みになられるのです」と問いかく
れば、

ガヌロン答えて、「それはシャルル王の御旨にあること。
その御稜威の高きこと、何人も及び申さぬ。」アオイ

三

ブランカンドラン、「まこと高貴の英雄かな、かのフランス
人たちは！

しかし、諸將の振舞いこそは奇怪至極、
主に向かい今度のような非道なる進言をなさるとは。

主を苦しめ、他人をも悩ますもの」と、続ければ、

ガヌロン答えて、「それはお間違いかと存ずる。

その譏りに値するもの、ローランの他には一人もないと心得
る。

昨日の朝でござったか、陛下が木蔭に涼んで在しますと、
甥のローラン、皮鎧^をに身を堅めて、跳んで参った。

確か、カルカソンニ^ののほとりを攻めていたのだが、

見れば手に真赤な林檎を握っていて、

王に向かい、「陛下、さ、これをお受けあれ！

天が下のすべての王冠を差し上げます」と申しした。

指揮者となり(三〇五六一
八行)またローラン以下の
遺骸輸送の指揮を取る。
(六) 禿頭王シャルル(ハ
二二七七)の時代に
エロという人物がいた。王
に取り立てられて八三三年
にサンズの大司教となり、
王の重要な諮問者となる。
後、王にそむきその敵方ル
イ・ジャン・エルマニクの
側に傾き、後またシャルル
王の側に帰属して、八六五
年に歿す。この人物がガヌ
ロンの原型か。

一四

- (1) イスパニアのバルバ
ストロ教区内にある城郭ナ
バルまたはナバラか。
- (2) ポルトガルのコイン
ブラカ。
- (3) エブル河沿いにある。
ヴァルテルラはテヌデラの
上手三里の距離にある。
- (4) シヤカの近くにある
地域。アラゴン王歴代の菩
提寺サン・ジャン・ドラ・
ピニヤのあるところ。
- (5) カタローニアのバラ
グエ。
- (6) エブル河沿いのテヌ
デラ。
- (7) シチリアのことであ
るが、ローランがイスパ
ン進取中に攻略した土地と
すれば不都合。ゴーチエ以
下多くの刊行者はセビリ
(セヴィリア)と改めている。
(8) シャンソン・ド・ジ

この傲慢さこそ、自ら墓穴を掘るといふもの。
日ごと日ごと、死地にわが身を追いつめる。

一度あれさえ亡くなれば、全き平和がくるでござらう。」ア
オイ

三〇

ブランカンドラン、「にっくきはローランなり、

世のすべての軍勢を降服させ、

天が下の国々を平定しようと願うとは！

して、かかる攻略をなすに、いかなる手勢をもつてでござるか。」

ガヌロン答えて、「すなわちフランス勢をもつてでござる。

ローランめの、この手の者を可愛がること！ 金銀はもとよ
り、

驃馬、軍馬、絹布、具足などをもつてして、

十二分にねぎらうがゆえに、手の者も、思いのままになり申
す。

いやなに、皇帝にさえ、のう！ (四〇)

東方諸国までも斬り従えんとするもの、まさにそのゆえにこ
ざる。」アオイ

三一

ブランカンドランとガヌロンは、駒を並べてゆくほどに、

かたみに心底証し合い、

ローラン亡滅を深く誓いぬ。

街道はるかに辿りゆき、

はやサラゴッスに着きければ、水松の下にて駒を降る。

松の木蔭には曲泉ありて、

アレキサンドリア渡来の絹布、これを蔽う。

イスパニヤ全土を統べる王、ここに坐し
サラセンの軍勢二万、その周辺に屯す。

使節の返答聞かんと、

全員は黙し、しわぶき一つするものなし。

ガヌロンとブランカンドラン、そこに姿を現わす。

三二

ブランカンドラン、伯ガヌロンの手をとって

皇帝の御前にまかり出で、王に言うには、

「南無御教えあらたかなるマホメットと

アポリンの御名において、御挨拶申し上げます。

われら、陛下の御言葉をシャルル王に言上いたしましたるに、

シャルル王には、両の手を高く差し上げられて、

神を讃えられたるまんま、御答えなく、

ここなる高貴の家臣を、おん遣わしになりました。

フランスの内でもまこと名門の士。和平か否か、

シャルル王の御胸の内を、しかとお聞き給わりたく」と申せ
ば、

マルシル答えて、「いざ、述べられい、承わらう！」と。ア
オイ

三三

さても伯ガヌロンは心中深く期するところありしかば、

いとも場慣れたるものごとくに、

弁舌いとど爽かに、王に申すに、

エスト「パンプリエヌの占
領」の中では、ラングルの
勇士として描かれ、ここに
暗示されている処刑が語ら
れている。なおこの処刑
の場所アルチュールは勿論
考証不詳の地名。たぶん岡
または小山を示す普通名詞
の転訛したものか。

一六

(1) シャルルマーニュに
臣従したガスコーニュ公ネ
ーム(またはネーモン)と
いうのがあるが、『歌』の
ネームは典型的的重臣として
詩人が創造したものとする
べきであろう。

(2) (V4) (N)には、二
四〇行と二四一行との間に
「諸侯のうちより一人の使
者をお送りなされ」という
一行がある。これを探って
行間に加えている刊行者も
いる。

一七

(1) 二四八行の前に「V4」
では、「皇帝御座を垂れさ
せたまい、さて仰せあり」
がある。

一九

(1) (V4)では二六四行の
次に、「大音声を張りあげ
てシャルルに申すに、王様
……」がある。

(2) (V4)二七三行の前に
「この頻報と隠襲にかけて
……」がある。